

## 【ポスター発表】

## 知的障害者の「いきいき」就労につながる要因に関する実証的研究 —ライフ・ライン・メソッドを用いて量的測定・解析を加えた少数事例研究への試み—

○ 日本福祉大学大学院 社会福祉学専攻 博士課程 瀧川 賢司 (会員番号: 008487)

山崎 喜比古 (日本福祉大学・会員番号: 005041)

知的障害者, QWL, ライフ・ライン・メソッド

### 1. 研究目的

わが国における障害者に対する現状の主な雇用施策は、障害者を一般就労させることに重点が置かれている。また、障害者の実証研究の対象者はほとんどが「軽度」知的障害者であった (Migliore 2007)。このように、一般就労への移行が困難で福祉的就労に従事している「軽度」より重い知的障害者の働き方に対する関心は低いと言わざるを得ない。障害者の働き方については、重度障害者の労働生活の質 (Quality of Working Life: QWL) に関する先行研究をレビューした結果、知的障害者のQWLを評価する方法は困難とされている。そもそも、QWLについては、Walton (1975) はQWLを構成する要素として、労働と生活のバランスを考慮した8要素を挙げ、Boisvert (1977) は労働に関する要素のみに限定した15要素を提案しており、研究者により具体的な要素が異なっている。加えてQWLの実証研究の少なさも相まって、QWLの評価方法は今でも議論する必要性は否めず、まずは知的障害者のQWL測定尺度の開発が必要であると考えられた。

以上を鑑み、本研究は、福祉的就労に従事しているコミュニケーション、特にインタビューが困難な「軽度」より重い知的障害者のQWLに着目し、QWLを評価する新たな方法 (ライフ・ライン・メソッド) を開発し、それを用いて、QWLの変化に関わるきっかけと要因を抽出し、労働生活への示唆を得ることを目的とした。

### 2. 研究の視点および方法

QWLの新たな測定・評価基準には、QWLを一言で示し得る「いきいき」労働生活という概念を採用した。その理由は、測定・評価の主体・客体間あるいは評価者間で日常的に用いられ、その意味も共有できる“間主観的”な in vivo コードに他ならないからである。評価方法には、ライフ・ライン・メソッド (Life-Line Interview Method: LIM, 以後「LIM」という) を組み入れたインタビュー調査法を用いた。調査対象は、A県における福祉事業所にて就労中のコミュニケーションが困難で「軽度」より重い知的障害者9名とした。調査方法は、家族 (主に母親) と事業所の支援員に対しインタビューを行い、横軸が就労年齢で縦軸がQWLを表す就労生活の「いきいき」レベルを評価してもらった。さらに、就労期のライフ・ラインに見られる「いきいき」レベルの上昇・下降のきっかけや高維持期間の要因等につ

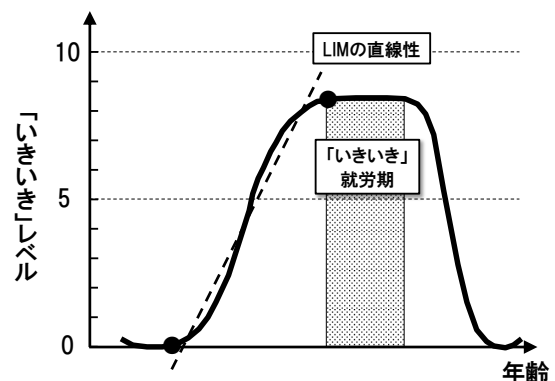


図1. LIMの作成

いて聞き取った。(図1)

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」および「日本福祉大学大学院倫理ガイドライン」に則り、1. 研究協力者に対する尊厳の尊重、2. 研究実施のための配慮と制限として、協力者への十分な説明や研究協力に対する自由を保障すること、3. 研究・実践活動で得られた情報の厳重管理、目的外使用の禁止等、4. 研究公開に際して、研究のもたらず社会的、人道的配慮に十分注意する等などに留意し研究を実施した。

### 4. 研究結果

9つの事例について、就労期間は3～26年であり、中央値は8年、中央値±5年の範囲内に8事例があった。またLIM形状が凹凸状となるものは5事例、平坦状となるものが4事例であった。さらに障害種別によるLIM形状の明らかな違いも見られなかった。このように9事例という少数事例ではあるが、多様なLIMの形状が得られた。

図2に「いきいき」就労期間の割合と家族-事業所の関わりの頻度との関係を示した。これによれば、家族が知的障害者の就労している事業所の支援員に日常の働きぶり等の情報交換を行う頻度が多くなるほど、言い換えれば、家族の障害者本人に対する関心が高く情報入手に積極的であるほど、障害者本人の「いきいき」就労期間の占める割合が高くなる傾向にあることがうかがえた。

次に図3にLIMによる「いきいき」就労生活レベルの変化の形状とインタビューにて抽出された「いきいき」就労生活レベルの変化の要因と考えられる焦点的コーディング数との関係を示した。焦点的コーディングは佐藤(2008)の方法を用いて抽出した。LIMの形状の曲線性が高まることで抽出される焦点的コーディング数が増加することが分かった。

### 5. 考察

「いきいき」就労期間に影響を与える要因を調べた結果、家族と職場とのコミュニケーションの重要性が示され、「いきいき」就労するためには、職場だけでなく、家族の影響が大きいことがデータで示された。また、LIMが曲線となる期間ではインタビューにおいて多くの要因が聞き出せる可能性があることが分かった。このように、LIMを用いることで、少数事例のインタビュー調査においても、質的測定・解析のみならず量的測定・解析が可能であることを示すことができたと考えられる。

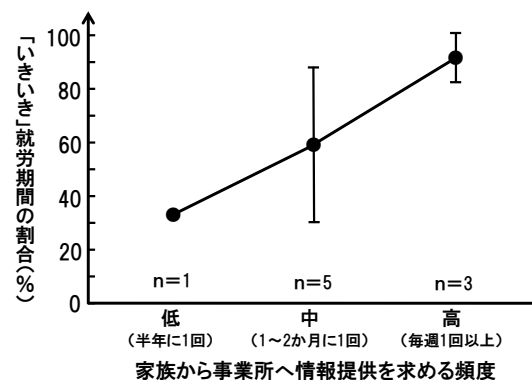


図2. 情報交換頻度と「いきいき」就労の関係

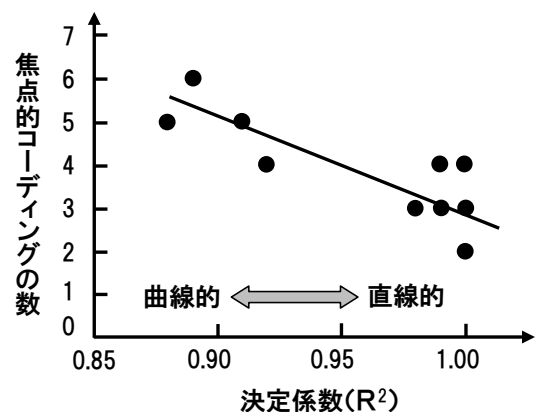


図3. LIMの形状とコーディング数との関係